

# ボルネオ島先住民社会の飲酒文化のグローバル化に関する文化人類学的研究 —酒で繋がる人間関係に着目して—

三 浦 哲 也

筑波大学人文社会科学部 准研究員

(現 育英短期大学 講師)

## 緒 言

これまで、文化人類学においては、酒の醸造および飲酒に関する多様な文化を記述し、特に贈与交換論においては、酒は社会性の高い財として分析されてきた。そして、酒にかかわる文化が、それぞれの社会構造の中で一定の機能と役割を持ち、さまざまな祭祀や儀礼はもとより、日常の人間関係の構築等においても極めて重要であることが指摘されてきた。一方、近代化・グローバル化が進む現在の世界において、酒にかかわる文化も世界的に画一化される傾向にある。そこでは、酒は、商品であり、健康に悪影響をもたらすドラッグであり、個人的な嗜好品である、という「西洋近代的」価値観に方向付けられているようである。

このような近代化やグローバル化は、ローカルな飲酒文化にいかなる変容をもたらすのだろうか。そして、それは、人々の日常生活にどのような意味を持つのであろうか。

本研究は、グローバルな飲酒文化の形成と、それに伴う人間関係の変化のありようを明らかにすることを目的とし、ボルネオ島の山間部に居住する先住民・ドゥスン族の社会を対象とする現地調査に基づき、生活の急速な近代化に伴う飲酒文化の変容が、彼らの日常生活と人間関係の実践にもたらす影響を記述・分析するものである。

## 研究の方法

本研究では、当該社会の人々が醸す酒の流通と、その酒を飲むために頻りに催される酒宴を巡って展開される人間関係について分析する。酒宴は、農事暦の節目や冠婚葬祭に儀礼的に行われるだけでなく、日常生活の一部として、毎週末、多いときには毎日のように催される。

村落社会内の人間関係、親族関係の強化と確認の場面であるこの酒宴を分析することで、当該社会の飲酒文化の特徴と、現代的な変化を明らかにする。

本研究が対象とするのは、ボルネオ島北部の山間地に居住しているドゥスン族の村落社会である。本稿の論考は、これまでに蓄積されたデータに加え、2009年8月および2010年3月に行った計19日間の現地調査で得られた資料に基づいている。

調査対象であるドゥスン族は、ボルネオ島北部、東マレーシア・サバ州に居住するプロトマレー系の人々である\*。伝統的には水田および焼畑での稲作を主たる生業とし、また精霊に対する信仰を保持してきた人々である。調査の対象とした村落は、サバ州タンブナン郡の北東部の山間地に位置するKN村(仮称)で、2009年8月の時点で39件の家屋に255人の人々が居住している。川沿いの狭い平坦地に水田が開かれ、また周辺の丘や斜面では焼畑が切り開かれている。水稲と陸稲を中心とする農耕と、狩猟や漁労を組み合わせた、自給自足的な生協形態が維持されてきた<sup>3)</sup>が、近年はパラゴムノキ(天然ゴム)をはじめとする換金作物栽培が盛んに行われている。

なお、KN村は、この15年程度の間、安価な工業製品や缶ビールを含む工業食品の流入、電力供給の開始、近代的な医療・衛生に関する情報の流入といった社会変化を経験している。

## 結 果

### 1. 飲酒の物質文化の変化

ドゥスン族が醸す伝統的な酒類は、トームス (*tohmis*) と総称され、結婚式、収穫祭などの儀礼の際には無く

\*彼らを指し示す民族名称は、これまで様々な政治的背景や民族文化復興運動などの文脈の中で、様々に転変してきた経緯がある<sup>1) 2)</sup>。本稿においては、「カダザンドゥスン族」と呼ばれている人々のうち、タンブナン郡に居住し、「ドゥスン族」を自称する人々のみを指してドゥスン族という名称を用いている。

はならない酒である。トーミスは、米もしくはキャッサバ芋を加熱調理したものを、カビ麹により固体発酵させた酒である。この酒を醸すための道具や酒器といった物質文化だけでなく、飲むための作法やルールがあり、ドゥスン族社会には、独特の飲酒文化が存在してきた。

しかし、近年の安価な工業製品の流入や、近代的な衛生観念の普及を背景として、「めいめい、別々に飲む」（≒「衛生的に飲む」）という「現代的な」要請に合わせて、飲み方が変わり、酒の仕込みに用いる容器、酒器が変化している。伝統的には、トーミスは陶器の壺の中で発酵させ、これに竹のストローを差し込み、皆で回し飲みするもの（以下、壺酒\*と呼ぶ）であったが、現在は、壺の代わりにプラスチック製バケツや、ペットボトルが多く利用されるようになってきている。また、缶ビールや工業的に作られた蒸留酒を現金で購入して飲む、ということも見られるようになった。

しかしながら、儀礼の場面では伝統的な仕込み方・飲み方・酒器が今でも用いられている。一方、「めいめいで飲む」「衛生的に飲む」という現代的な要請に対して、ドゥスン族の人々は、伝統酒をプラスチックのコップを用いて飲むというかたちで対応している。あるいは、竹筒内で発酵させ、竹ストローで飲むという伝統的な飲み方があったのだが、これを、竹筒の代わりにペットボトルを用いるという現代的な方法でリバイバル（復活）させている。

## 2. 酒の売買における人間関係の変化

トーミスは基本的には自家消費用に醸造されるのであるが、しばしば、世帯間で売買される。場合に応じて、「余剰在庫」がある世帯から購入することがあるのである。

そして、それを見越して、販売を前提に大量に醸造している世帯もある。トーミスの売買はごく最近まで、基本的にはツケ買いであった。トーミスは、壺やバケツに仕込まれているので、購入者は後日それらを返却する必要があり、その際に、代金が支払われることが多く、さらにはもっと遅れて、何回分かをまとめて支払うこともしばしばであった。

しかし、2008年以降、1.5L以上のペットボトルの上部1/3ほどを切り取った容器の中でトーミスを発酵させ、これにプラスチックストローを差し入れ、水を注ぎ足しつつ、めいめいで飲むという形式（以降、PET酒）

が一般化した。これにより状況が一変した。トーミスはペット容器の中で醸造されることとなり、トーミスはペット容器ごと販売されることになったため、以前の壺やバケツ時代に比べると、2008年から、現金払い、即時決済での売買が急増した。

後日返却することが必要な壺やバケツと異なり、トーミスをペット容器ごと買い取る形に変化したことで、現金による即時決済の傾向が強まり、代金の支払いまでの日数が大きく短縮する傾向が見られる。

PET酒の普及により、従来の対面的な人間関係に基づく信頼によって成り立っていたツケ買いでの酒の売買が減り、現金による即時決済での売買が多く行われるようになってきている。このことは、醸造容器が変化することで、酒の売買を通じての人間関係の在り方が、大きく変質してきていることを意味している。

## 3. 酒宴でのコミュニケーション

壺酒を飲む場合、壺は、車座に座る酒宴の参加者たちの中心に置かれ、その酒を飲む者は、衆人看視のなか、全員から注目を浴び、声をかけあいながら飲むものであった。しかし、壺酒がPET酒にとって代わり、各自のPET容器から酒を飲むという状況に変わったことで、酒を飲む・勧めるという行為や、その順番をめぐるコミュニケーションの内容は、変質した。

従来の壺酒においては、自分の飲酒するタイミングは、その時々壺の前に座って酒を飲んでいる者の動向と、密接に関係する。そのため、ゆっくり飲んでいる者があれば、それを急かすような発言をしたり、からかったりした。酒を飲む者は、まわりの人々と声をかけあい、冗談を言い合いながら、飲むものであった。つまり、「1人対全員」というコミュニケーションが存在した。

しかし、PET酒では、他者の飲酒のペースは、自分の飲酒のペースや量とまったく関係がないから、他者から急かされることはない。PET酒での酒宴では、そばに座る者と、「1人対1人」での会話が主体となる。その意味において、酒宴への参加者同士のコミュニケーションが、大きく変質していると言える。

## 4. 酒宴での人間関係の重要性

酒器、醸造の仕方が変化し、酒宴での酒の飲み方が変化する中で、酒と酒宴の社会的な役割と意義も変化するであろうか。

\* 壺の中に麹で仕込んで固体発酵させたものに水や湯を注ぎ、これをストローで飲む酒は、東南アジア大陸部を中心に、広く見られる。吉田は、その起源を西アジアに求めている<sup>4)</sup>。

複数の男性をサンプルとし、招待された酒宴への参加／不参加や、酒宴への参加時間（＝飲酒する時間）を調べ、1999年、2005年、2009年とで比較したところ、酒宴への参加の形態にはほとんど変化はなかった。

KN村においては、酒は、儀礼の場面だけでなく、親族や近隣の人々と日常的に飲み交わされており、たとえ飲酒の形態が変わっても、酒宴はきわめて日常的に頻繁に行われる社交的活動でありつづけている。ここでは、様々な話題が取り交わされながら、村人との人間関係が繰り返し調整・確認・強化されている

## 考 察

マレーシアの急速な経済成長を背景にして、情報と工業製品が急速に流入するようになったドゥスン族の村落では、酒という嗜好品に関する伝統文化も、急速に変化していることが確認された。その基本的な方向は、「めいめい、別々に飲む」（←「衛生的に飲む」）という方向である。この現代的な飲み方の要請に合わせて、飲み方が変わり、酒の仕込みに用いる容器、酒器が変化してきた。「めいめいで飲む」「衛生的に飲む」という現代的な要請に対して、PET酒という現代的な方法で対応している。

酒の売買や酒宴でのコミュニケーションのあり方は変化している。とはいえ、ドゥスン族社会においては、いまだに伝統的な発酵酒の価値を重視しており、村落の中で生産され、売買され、消費される伝統酒と、それを飲む酒宴が、社会的文化的に豊かな意味と高い価値を持っていることが明らかになった。

ドゥスン族の人々も、容易に現金で缶ビールを買うことができるようにはなったが、農作業を手伝ってもらったお礼に、缶ビールを出すような事例は、まだ確認されていない。結婚式などに、缶ビールが供されることも無い。そのような場面では、必ず伝統酒が振舞われる。つ

まり、彼らは、缶ビールと伝統酒を、等値には考えておらず、伝統酒に特殊な意味と価値を認めているのである。だからこそ、現代的な要請に折り合いをつけ、「めいめいで飲むため」に、わざわざ時間をかけてペットボトルを工作する。このような現象は、ドゥスン族社会が、グローバリゼーションの結果として外部から流入したモノを資源として、独特の方法で創造的な対応することで、彼ら自身の飲酒文化に新たなフェーズを作り出している、と捉えることが出来る。

このことは、ドゥスン族は、その伝統的な酒の醸造と飲み方に、外部から流入した工業製品やその廃物を利用し、その酒宴でのコミュニケーションの在り方を含め、新たな飲酒文化を創造していることを示している。グローバリゼーションの強い影響を受ける状況下に条件付けられながらも、ドゥスン族は、その醸造と飲酒の方法において、自律的な対応によってローカルな創造性を発揮していると言える。

## 謝 辞

本研究にご援助いただきました財団法人三島海雲記念財団に、心より感謝申し上げます。

## 参考文献

- 1) 上杉富之：民族と文化の創造－東マレーシア・サバのカダザン人の事例から、(『文化の生産』田村克己編)，pp.65-81，ドメス出版，1999年。
- 2) 山本博之「カダザン人のナショナリズムとエスニシティ：英領北ボルネオ（サバ）における収穫祭の成立」、『ODYSSEUS』6，pp.41-60，2002年。
- 3) 三浦哲也『東マレーシア山間部農耕民ドゥスン族の生計維持機構』，筑波大学大学院修士課程環境科学研究科学位論文，2001年。
- 4) 吉田集而「壺酒－東南アジア大陸部の酒－」，山本紀夫編著『増補酒づくりの民族誌－世界の秘酒・珍酒』，八坂書房，2008年。